

1951年、秋も深まった頃、高鳳蓮は結婚しました。婚家は、彼女の生家から十里ほど離れた文安駅郷白家塬村にありました。これは父母が決めた結婚で、相手は六男五女の末っ子でした。婚家は貧しく、一家のおじがかつて外地へ働きに出て、その地で亡くなった時も、遺骸を引き取りに行くことすらできませんでした。夫には兄弟姉妹が多く、水の少ない村の高台に住み始めたこの若い夫婦にとって、これからの生活がどんなに困難なものになるかは、十分に予想されることでした。

昔から、中国では「日照りの後の慈雨」、「異国で旧友との再会」、「新婚の夜」、「科挙に合格した時」を、人生での四つの喜びに数えて来ました。しかし、高鳳蓮の婚礼は、思い出したくないほどみじめなものでした。普通花嫁は籠に乗って輿入れするのですが、婚家は非常に貧乏でしたので、借りた籠は今にも壊れそうで行列の間中、ギシギシと鳴って不安な気持ちにさせられました。やっと白家に着くと、家の中にはオンドルがあり、オンドルの上に羊の毛皮が敷いて

ありました。穀物の収穫籠が二つ並べてあり、竈の傍には大きな水瓶が一つ置いてありました。新婚の夜は、花嫁が持参したものを見せて、いろいろ話し合うのが常ですが、新郎は話下手で、花嫁と殆ど口も利かず、何事もなく過ごしました。2, 3日すると、オンドルの上のあの羊の毛皮は、おばさんの

家から借りてきたもので、穀物収穫籠も三番目の姉の家から持ってきたものだったと分かりました。結局、新郎自身の持物は、大きな水瓶一つだけでした。



高鳳蓮の夫・白鳳楽



高鳳蓮の家族(夫の母を囲んで)

高鳳蓮の夫は、白鳳楽と言いま三歳年上です。とても善良で誠実な陝北男子ですが、普段は寡黙で、野良仕事や馬の世話などの仕事だけは良くできるというような人でした。それに引き換え、高鳳蓮の性格は全く反対で、一本気で、まめで、負けず嫌いで、何事にも一番にならないと気がすみませんでした。結婚した男性は、家庭を代表して表に出て体面を保つものですが、高鳳蓮の新家庭は、思いもよらなかったことに、家庭内の全てのことが彼女に任されたのでした。

新しく家に入った嫁が、家の内外のこと全て、家事全般、炊事や水くみ、老人の世話など、季節を問わず朝から晩まで全力を尽くしました。そしてこの努力は、三十年後、見事に報われました。高鳳蓮夫婦は三男三女の子供たちを育て上げ、しかも何のコネもないのに、三人の息子は都会に出て、公務員になりました。三人の娘は皆、然るべき家に嫁がせました。高鳳蓮は、高家の運気を白家に持ち込みましたが、白家の六人兄弟の中で、この恩恵にあずかったのは、夫の白鳳楽だけでした。

20世紀の60～70年代は、生活が苦しくて、高



終日忙しく立ち働く高鳳蓮

鳳蓮の目は、剪紙の方に向きませんでした。日中は、6人の子供を養うのに忙しく、子供たちの布靴を作るのさえ、夜中に皆が寝静まってから始めました。当時、政府の施策は現地の実情に合わず、人びとは積極的に仕事をしようとはせず、加えて、天候不順で作物の作柄もあまり良くありませんでした。しかし、家にはおなかをすかせた子供たちが6人もいて、春になる前に、家の食糧は尽きてしまいました。高鳳蓮の責任は益々重くなり、子供たちの世話の他に姑の世話もしなければなりません。

彼女は隣人たちに、トウモロコシを少しずつ借り歩きました。毎日のことで、借りられなくなると、村の外へ、物乞いに出かけました。誰も好んで物乞いなどしたくありませんが、子供が飢えて死にそうなときですからメンツなど構ってられません。幸い、高鳳蓮には知り合いが多数おり、周りの人たちは彼女の家の様子を知っていて、常家で一碗、張家で一升と出かける度にいくらかの食糧を得ることが出来て、何日かは凌ぐことが出来ました。村から十里四方の村々で、高鳳蓮が食糧を恵んでもらうために訪れない村はありませんでした。当時を振り返って、彼女は、「食糧を乞い歩くほど、面目ないことはありません。あの時の様子・気持ちは一生忘れられません」と言います。

食糧を乞い歩くことも長くは続きませんでした。その年は、どの家も食糧が不足して、高鳳蓮に分け与えることも出来なくなり、彼女は仕方なく、村

の男たちと一緒に黄河を渡り、山西省にトウモロコシを買いに出かけました。当時、山西省のトウモロコシは周辺と比べると半値ほどで購入でき、一家にとってはずいぶん助かりました。しかし、一袋50kg以上のトウモロコシの袋を、担いで岸から船に積み込み、黄河を渡り終わると再び船から担いで岸にあげるのです。十数袋のトウモロコシを一つ一つこうして運ぶのですから、大の男でさえ骨がきしむほどの重労働ですが、これを女の身で行いました。

春先の黄河は、上流の山からの雪解け水を集めていますから、ちょっとした不注意で船がひっくり返り、黄河の滔々たる流れに呑み込まれてしまうこともあります。

しかし、山西省のトウモロコシが周辺と同じように値上がりしてしまいました。すると今度は家畜のブローカーを始めました。これは厳密には法に触れるので、人目を忍ばなければなりません。高鳳蓮は日中休みなく働き、生産隊の仕事をこなして労働点数を上げ、夜暗くなってから、知り合いに会わないようにひっそりと家を出るのです。一晩中歩いて、夜明けに隣県の家畜市場に到着し、良い家畜を選んで安い値段で買い付け、ほとんど休まないで、やって来た道に戻ります。靴は破れ、足が腫れてくることもあり、買った家畜が歩くのを嫌がることもありましたが、高鳳蓮としてはどうしても夜明けまでに市に到着し、家畜を売って利益を得なければなりません。

高鳳蓮は、家畜が上手く売れても、温かい麺を食べるお金を惜しんで、食堂で麺のゆで汁を分けてもらい、持参の硬い餅(小麦粉を練って、油で焼いたもの)を食べて、自分自身を労うのでした。家畜を売った利益でトウモロコシを買って帰り、おからや榆の木皮、綿の種などを混ぜて餅にして食べました。

「美味しいとは言えないけれど、たっぷり食べられる方を選びましたよ。今は毎日白い粉を食べ、ト

ウモロコシは家畜の餌にしているけれどね」。高鳳蓮は、深い感慨に浸りながらこの話を語り今の生活に感謝するのでした。

夫が、生産隊に従って外地へ出稼ぎに行くようになり、子供がまだ小さいので心の慰めを剪紙に求めるようになりました。深夜、皆が寝静まってから、陝北民歌の歌詞にあるようにオンドルの上に灯した灯りで、花や鳥、魚や草など子供時代に剪ったことのあるものを剪っては、追憶にふけりました。多産を象徴する石榴・抓髻娃娃(髪を結んだ女の子)などの後世に伝えたい絵柄や、門神、竈の神などの家庭の安寧と発展を祈る図柄など、思い出されるままに次々と剪り出しました。

20世紀60年代中頃、村は飢饉に見舞われましたが、この困難な時期、高鳳蓮は進んで村のリーダーとして働き、村の党書記、婦人部長などを引受け、防災や耕地の整備などに村民と一緒に取り組み、成果を上げて、村民から信頼され、敬愛されるようになりました。

黄土高原に住む人びとにとって、誇りを失わないことは大事なことです。自分たちの生活を向上させようという要求はあまりありません。住居に関して言えば、南方の村落では古くからの住宅が残っており、黄河対岸の山西省の土地にも古い邸宅が至る所にあります。同じ黄土高原でも、延川より少し北の綏徳県や隣接する米脂県などには、堅牢で美しい石造りの窑洞があって遺産として子孫に残すことが出来るものがあります。しかしな

がら延川地域一帯の黄土は地盤が脆い為、深い溝が無数に刻まれ、窑洞の建築資材も粗末なので、一生住み続けることが出来ない場合が少なくありません。この地域では崩れて住めなくなった窑洞が崖のあちこちに打ち捨てられたままになっているのです。

高鳳蓮は、剪紙で美しさを追求する努力を惜しみませんでした。貧困のために生活環境を整えるためにお金を費やすことができず3回の窑洞崩落事故を体験しています。一度目は、古い窑洞で生活していた頃、雨後に窑洞の前の部分が崩れ落ちました。幸い怪我はしませんでした。そこには住めなくなり、移り住んだ生産隊所有の窑洞も長年修理をしておらずいつ崩れてもおかしくない状況でした。

そんな状況から新しく窑洞を掘ろうと決心した高鳳蓮は、昼間は生産隊で仕事をし、夜帰宅すると窑洞掘りを始めました。夫が穴を削り、彼女がその土を運び出すのです。そのうちに灯油が買えなくなり、暗闇の中で仕事をしました。二輪車が無いので、木製の一輪車で土を運び出し、3か月かけて自分たちの窑洞を完成させ、子供たちと一緒に暮らせるようになりました。

その後、子供たちは育ち、窑洞が山陰にあるので陽光が当たらず、風水にも影響があるので、彼女は再度、日の当たるところに3つ穴の窑洞を掘る決心をしました。この頃には、子供たちは皆大きくなり作業の手助けが出来るようになりました。夫が



1968年 県の婦人部交流会



高家がある白家村周辺は人々のお腹を満たせない痩せ地だ



高家があった山間

崩れた土砂に巻き込まれて、病院に運ばれたこともありましたが、幸いなことに肋骨にひびが入っただけで済みました。正に、神仏に守られていると強く感じる出来事でした。

高鳳蓮は言います。

「他人によっては、一生かかって貯めたお金でも家一軒買うことが出来ない人もいるのに、私のような農民が一生に三度も窑洞を掘ったなんて、かなり良くやった方でしょう」。

過去の事故を教訓に高鳳蓮は石の窑洞を造る決心をしました。子供たちはすでに成長し、働きに出ているものもありました。子供たちの内、経済力のある者はお金を出し、力のある者は労力を出し合って一年半かけて、とうとう村の最高の場所に、三穴の、広くて快適な石造りの窑洞を完成させました。これ

で、家が崩れる心配をすることもなく、安心して暮らせるようになりました。これは村で最初の石造りの窑洞で、以後、村の人達は皆石造りの窑洞を造り始めました。高鳳蓮は、いつも村人たちのお手本でした。

高鳳蓮は、字が読めませんが、生活万端にわたる思考能力は非常に優れています。高家の畑の作物は、他の家のものとは比べて成長が速く良い実を付けます。リンゴを育てれば、他の家のものとは比べて甘い実が



自分で植えて育てたリンゴを収穫する高鳳蓮

沢山なります。スイカを育てれば、他の家のものより大きくなります。字は読めなくても、普段から耳でよく聞き、頭を働かせて工夫を重ね、効果が上がることを実行します。例えば、スイカの雄花の芯を雌花の芯に押し付けて、直接受粉させることで、受粉率を大幅に高めました。これは剪紙の図案「扣碗」^{kòu wǎn}注にヒントを得たものでした。この「扣碗」は、「龍と鳳凰」、「魚と蓮」、「蝶と花」など、世の中で相対するものを合わせることで、バランスを取る中国的な思想(陰陽思想)を反映しています。

この他、一つの株に異なる花を咲かせる剪紙の図案から、高鳳蓮は果樹に接ぎ木をしてリンゴやナシを実らせました。乾燥に強い酸っぱい棗に丸い棗の木を接ぎ木して、大きくて甘い棗を实らせました。農業上のハイテクともいえる技術を、字

が読めない農村女性が実際に行うことをだれが想像できるでしょう。スイカの受粉も、高鳳蓮は夫と共に何回も実験を繰り返し、早朝、露があるうちに行うのが最も効果的であることを探り出しました。「何事も頭を働かさなければ…」と言うのが、彼女の信念なのです。



高鳳蓮が剪った「扣碗」
kouwan

■注

扣碗：'蓋付きの椀'をいうが、剪紙の図柄では蓋は男性(陽)を表し、容器は女性(陰)を表す。